

『リハビリの結果と責任 絶望につぐ絶望、そして再生へ』 看護のありようが 障害受容の当事者から 問いかけられている

著：池ノ上寛太／定価：1,890 円(本体 1,800 円+税 5%)
発行：三輪書店／TEL：03-3816-7796



突然の交通事故から生還したものの、重度の障害を負ったまま3か月ごとの転院を繰り返しながらのリハビリ入院4年間。在宅生活に復帰したとはいえ、現在なお障害は続いている。その当事者が、自助具を装着した指で叩いたキーボードから打ち出した数々の真実の重み。否認、怒り、忍耐、疑念に揺れ動きながら、複数の会社経営者として活躍した著者は、企業のコンセプトから見たリハビリの世界を批判し、結果をふまえた責任の曖昧さを厳しく問うている。「人間を対象に」「生命を預かるゆえ」にと、医療者の誰もが疑いなく持ち続けた論理をひょっとしたら隠れ蓑にして来なかったか。納得しながら一気に読み進めた部分でもあった。長期にわたる療養生活で、看護のありようについての指摘にも耳傾けなければなるまい。全介助の患者の集まる食堂の一隅で、1人の看護師が複数の患者をかけ持つ介助場面、「自分の目の前にあるご飯を見ながら、その思うに任せない気持ちで食べさせてもらえる順番を待ち……無念さで涙がポロポロ……強烈な疎外感を感じ……」と聞けば、人手不足を理由に正当化し、慣習化しているこの行為を、看護師の立場から何と答えるべきだろう。

挫折感や絶望感は食事時にとどまらない。週2回の入浴について、「『機械浴』の体験は不慣れで非常に心地悪く……屈辱感を感じる」のだと。おそ

らく看護師はこのような患者のつらい気持ちをよそに、「気持ちいいでしょう?」と、むしろ押しつけさえしているのではないだろうか。リハビリへの数々の疑問の一方で、父母の思い出や家族との会話やエピソードをはじめ、著者の生き甲斐であった事業展開への夢などが語られている。諦めを超えた絶望の局面にあってさえ、折々の美しい自然の四季の描写があって、その語りの背景の深刻さを和らげている。著者のみずみずしい感性の発露を随所に感じた。終章に近く「健常者の世界と障害者の世界」の間をさまよう著者に向けられた院長の言葉に、それまで当たり前と感じていた世界からの脱却が始まる。その武器(ツール)が、持ち前の夢と誇りであり、そこで啓いたのが「一人の人間としての自分」を受け入れた実感であった。一口に障害の受容といっても、そのバリエーションは多様であり、個別的であるばかりか、何と奥深いかを教えられる。著者が言う「最後となる病院での医師とリハビリスタッフへの幸運な出会い」とは、過去の他院での処遇との差異ではなく、障害を人生のプラスの体験に転化した契機を受け取ったゆえであった。耐えられる限界までの試練を超えて「楽しくなければ人生じゃない」との言葉を取り戻して、しみじみと時間を実感する著者の思いに感動を重ねた。打たれ強さを失いつつある現代の若い読者の必読書としたい。